『語用論研究』第 24 号（2022 年）pp. 179–191
© 2022 年　日本語用論学会

〈書評論文・書評〉［書評］

平田未季（著）『共同注意場面による日本語指示詞の研究（ひつじ研究叢書（言語編）第 168 巻）』

東京：ひつじ書房，2020，viii＋234p.，ISBN 978–4–8234–1014–7

堤　良一
岡山大学

1. はじめに

本書は、平田未季氏の博士論文「注意概念と推意理論を用いた日本語指示詞の統一的分析」（2015 年度、北海道大学）の前後に公刊された論考を加え加筆修正したものである。各章タイトルを、概略とともに記す。

第 1 章「指示詞とは何か」：本書の研究対象である指示詞について、先行研究をもとに定義づける。さらに本書のキー概念である「共同注意」について論じられている。そして、本書が取り組む課題が示される。

第 2 章「本書の分析の枠組み」：近年の指示詞研究が注意概念と会話の推意理論を用いていることを示し、残された問題点について指摘する。

第 3 章「注意概念を用いた「中距離指示」のソ系の再分析」：これまで「中距離指示」とされてきたソ系指示詞を、「聞き手の注意の存在」を示す形式であると提案している。

第 4 章「ソ系の外部照応用法と内部照応用法の統一的分析」：外部照応用法のみならず内部照応用法にも第 3 章の分析が応用可能であることを示す。

第 5 章「無標のコ系と有標のア系」：会話の推意理論を用いて、コ系の「近」の意味が指示詞にコード化されたものではなく、尺度推意により生じるとする。

第 6 章「注意概念と会話の推意理論を用いた日本語指示詞の体系化への展望」：3 章から 5 章までの議論を受けて指示詞の体系化を行う。歴史的な事実にも触れている。

第 7 章「共同注意場面の構造と指示詞選択のダイナミクス」：ココ、コノ、コウ、コレなどの形式が、どのように注意の調整に用いられるかを論じている。第 8 章は「おわりに」で、まとめと今後の課題である。

本書が日本語指示詞研究にとって重大な意味を持つものであることは間違いない。なぜならば、本書で採用されている枠組みは、国内の日本語指示詞研究では見られなかったものであり、一種の衝撃をもって受け止められていると言ってよいからである。

本書のこれまでの日本語指示詞研究との大きな違いは、次のようにまとめられる。

(1) a. 自然会話をデータとして用いている。
b. 説明装置として注意概念／会話の推意理論を用いている。
c. 指示詞の意味から「距離」の概念を排除している。

a について、本書は従来の内省や実験を基にした研究ではなく、自然会話を用いている。それにより指示詞がどのような状況でどのように使用されるかを描き出そうとしている。今後の指示詞研究に導入されるべき視点である。b と c については本稿で詳しく検討する。

本書は以上のように、これまでの日本語指示詞の研究で蓄積されてきたデータを、まったく新しい観点から捉え直した意欲的な一冊である。このような書物の場合、そのパラダイムシフトの試みがどれほど成功しているかが議論の対象となる。本稿もそのような観点から、本書の大きな理論的枠組みである 2 点──注意概念と会話の推意理論──について検討していく。具体的には 3 章と 5 章を詳しく見ていく。

2. ソ系について（第 3 章）

第 3 章では、現場指示用法における、中距離指示のソと言われてきたものについて、注意概念を用いて、ソが「聞き手の注意の存在」を示す形式として分析できると主張する (p. 63)。「聞き手の注意の存在」は次のように定義されている。

(2) 指示詞を含む発話の発話時に、話し手が意図する対象に聞き手が視覚的注意を向けている、もしくは発話時以前に聞き手が視覚的注意を向けており、かつ、その対象の特定が聞き手にとって容易であると話し手が解釈できる状況。(p. 61)

これまでの指示詞研究において、聞き手の領域を指示するソと、中距離を指すソの 2 種が広く認められてきた。一方、金水・田窪 (1990, 1992) は、「中距離」という用法を認めず、両者は聞き手を介した間接的な指示であるとした。平田はこの点に賛意を表しつつも、中距離指示を「聞き手領域」という概念に還元することはできないとする。その根拠として堤 (2012) が、聞き手領域のソではアへの言い換えが不可能で、中距離指示ではアへの言い換えが可能であると主張することを挙げる。

(3) (聞き手が持っているものを指して){それ／*あれ} 何？
(4) a. (タクシーの中で) 運転手さん、{そこ／あそこ} の角で降ろしてください。
b. ねぇねぇ、今、{そこ／あそこ} のスーパーで大安売りをやっているよ。
(堤 2012: 155)

平田は（4）のように、ソとアが言い換えられる場合について、実際の会話場面のデータに基づき、会話参与者が、対象に視覚的注意を向けていることが話者にとって確認できれば、ソが用いられるとした。

（5） ゼブラ柄のビル

（A と B が展望台の窓の前の隣り合ったいすに座り、正面に広がる景色を見ている。A は共通の友人が住んでいるビルの場所を B に教えようとする）

01 A: あそこ見て 斜めに森あるでしょ
| 左手で指さし

02 B: （A の指さしに合わせて顔を動かす）

03 A: そこの裏 白黒のゼブラ柄のビル ゼブラ柄の
| 指さしを継続

04 B: え どれどれ？ あの鉄塔が近いやつ？
| 右手で指さし

05 A: （B の方を見た後、正面に顔を戻し） それそれ
| 左手で指さし
白と黒 黒じゃないな グレーの B のまっすぐ前

06 B: あー あれかなあ

07 A: （B の方を見て）そうそう（顔を正面に戻し）
ねずみ色のやつ それが C ちゃん住んでるんだよね。 （p. 49）

この例では、同じ指示対象に AB ともに注目していることが確認できる度にソが用いられ、そうではない場合にアが用いられていることに注目しよう。ここでは平田が言うように、「聞き手の注意の存在」がある場合にはソが用いられている。

このことは、評者自身が経験した次のような例でも確認することができる。評者の家の近所にケーキ屋がある。店内は、図 1[1] のようにショーケースが正面にあり、右隣にレジ、その奥が厨房になっており、客から中が見えるようになっている。その日、ショーケースにケーキは少なく、そこから商品を選んだ。会計の際、レジを打つ店長の肩越しに、準備中のケーキが何種類か並べられているのが見えた。評者は一番手前のケーキを指さしながら、次のような発話を行った。

（6） 評者：店長、あれはなんですか？
店長：どれですか？（レジを打つ手を止め、背後にある厨房を肩越しに見る）
評者：あれです。あの一番手前の。

[1] 図は Warittha Koseeyaumporn 氏による。

店長：これですか？（店長が、評者の意図するケーキを指さす）
評者：それです。

【図 1 ケーキ屋の厨房】

ここでも、評者は、同じ位置にあるケーキをアレ、ソレの両方で指している。聞き手（店長）が対象に注意を向けたことで話し手（評者）の指示詞が変わっている。

上記から平田は、中距離指示のソは「聞き手の注意の存在」を前提にして使用されるとした。日本語指示詞研究にとって新たな視点であり評価される。

しかし「聞き手の注意の存在」が、ソの本質的な意味であるとするにはさらに慎重な議論が必要である。というのは、「聞き手の注意の存在」によって、「聞き手領域」が伸びたと考えることもできるからである。平田の指摘どおり、指される領域は、発話者や周りの環境などによって伸縮する。だとすると、聞き手の領域が、「聞き手の注意の存在」によって伸びたものが、中距離指示であると考えることもできる。つまり、「聞き手領域」を指示する用法の方がソにとってより基本的なものであるとも考えられる。これは、金水・田窪（1990, 1992）の考え方に通じる。

平田はこれと反対の立場をとる。すなわち、「聞き手の注意の存在」が基本的で、「聞き手領域」の指示は派生的に生じたとするのである（第 6 章）。歴史的なデータの検証は紙幅の関係で稿を改めて論じたいが、共時的に見た場合でも、「聞き手領域」の指示を基本と見る方が、説明が少なくて済むと思われる。例を見よう。

次のように、聞き手の注意が指示対象にない場合でも、聞き手の身体に接触している、あるいは聞き手に極めて近い場所にあるものの場合、ソが用いられる。これは、「聞き手領域」を指示するために「聞き手の注意の存在」は必要ないことを表している。

(7) 聞き手：僕のめがね知らない？
話し手：（聞き手のおでこにめがねがあるのを見ながら）それじゃない？

一方、「中距離指示」には「聞き手の注意の存在」が必須である。この事実を平田の立場から説明すると、ソの使用には「聞き手の注意の存在」が必要な場合（中距離指示）と、そうでない場合（聞き手領域指示）があることになる。従来と捉え方は変わるが、ソに 2 種類の用法を認める点では同じである。評者には、中距離指示用法を、「聞き手の注意の存在があることによって、聞き手領域が伸びてきた領域」を指す用法として、「聞き手領域指示」の一種であると考えた方が両者を統一的に説明できると思われる。

ただその場合でも、堤（2012）の、「聞き手領域」にはアが現れないという点は説明が必要である。これは、日本語では聞き手の領域を認めよという要請が強く働くということ

の反映ではないか（堤 2012、8 章、澤田 2016 も参照されたい）。よほどのことがない限り、「聞き手領域」を積極的に認めなければならないのだろうと思う。

3. コ系について（第 5 章）

第 5 章では、Levinson の尺度推意と Enfield（2003）による、ラオ語の nii4, nan4 の議論を援用しながら、日本語のコ系指示詞には、最小の意味のみがコード化されており、より特定的な意味を持つア系の存在によって、コ系の「近」という意味が推意によって生じるとする議論を展開している。以下、先行研究を批判している部分と、平田氏の自説の部分に分けて見ていこう。

3.1. 先行研究の批判について

Hoji et al.（2003）、田窪（2008）では、コ系とア系の意味は遠近の対立であると考えられ、コ、アはそれぞれ次のような意味を持つと論じられた。

（8） コ系とア系の意味記述
コ系 [+ proximal]
ア系 [− proximal]

話者は、対象を様々な要因により「近」と判断したり「遠」と判断したりする。前者であればコが、後者であればアが用いられるとするわけである。

ここで平田が問題にするのは、次の例のように、物理的に遠くにある対象を、話者の心理的な操作によって「近」であるとしてコで指すことはできるが、(12)–(14) のように、その逆、つまり、物理的に近くにある対象に心理的な操作を加えて、それを「遠」としてアで指すことができないという点である。

（9） （殿様が家臣に話している。殿様は 10 メートル先に男の人を立たせて）
{あの／この} 男はこんどわしがアメリカから連れてきたアメリカ人じゃ。

（10） （10 メートル先の犬を指して）
a. {あの／*この} 犬はハスキーですか。
b. {あの／?この} 犬はハスキーですよ。

（11） a. （ポツンと立っている 20 メートル先の木を指して）
{あの／この} 木は樫の木です。
b. （いろんな木に囲まれている 20 メートル先の木を指して）
{あの／?この} 太い木は樫の木です。

（Hoji et al. 2003: 108, 田窪 2008: 329–330）

（12）（部長が日本に招待した男の人が部下のすぐ横に立っている。部下が部長に対し、その男の人を指して）
部長、{この／*あの} 方はアメリカ人なんですね。
（13）（自分のすぐ横に立っている男の人を指して）
{この／*あの} 方は、どちらから来られたんですか。
（14）（自分のすぐ横にいる大勢の人の中の 1 人を指し）
{この／*あの} 方が部長が招待されたスミスさんですか。 （p. 97）

平田は、これらに非対称性を見出している。すなわち、「アで言える場合はコで言い換えられるが、コで言える場合はアで言い換えられない」。

このことは田窪（2008: 200）では次のような制約として説明されている。

（15） 近称制約
基本的に遠くにある対象を心理的な操作により近くに捉えなおすことはいつでも可能である。これに対し、近くにあるものを遠くに捉えなおすことはかなり難しい。

(9) は、聞き手の存在を無視することで得られる。一方、(10) は対象に対する知識の有無で説明されているが、評者には ab どちらもコノは使いにくい。日本語母語話者 37 名に両者を 5 段階評価してもらった平均値は、(10)a が 1.86（$SD = 1.19$）(10)b が 1.78（$SD = 0.93$）となる。ウィルコクソンの符号順位検定の結果、両者に有意な差はない（$.10 < p$）。しかも、b の方が a よりも平均値が低くなっている。この結果は、日本語では 10 メートル先の対象をコで指すことが不自然であること、知識の有無（多寡）によって不自然さは改善しないことを示している。(11) は樫の木という、指示対象の大きさが影響し、卓立性とは直接関係がない可能性もある。以上から、心理的な近接性が、遠であるものを近にするという議論自体が疑わしいものとなる。

また、平田の批判が成り立つためには、コ系指示詞は心的に近い対象を指し、ア系指示詞は心理的に遠い対象を指すことが前提となるが、このことは自明ではない。堤（2018）、岡﨑（2018）、藤本（2018）などは、主に文脈照応用法における調査をもとに、心理的な対立はソとアの間で見られ、ソが心理的に遠い対象を、アが心理的に近い対象を指すと結論づけている。実際に、(12)（13）(14) の例を、ソノで指すことは可能であり、なおかつコノで指すよりも、冷たい印象、あるいは興味、関心がないといったニュアンスが強く表れる。紙幅の都合上 (12)′ でのみ確認しておこう。

(12)′ 部長、その方はアメリカ人なんですね。私は英語できないから、一緒に仕事するのは遠慮しておきますね。

それでも、田窪（2002）が「近称制約」と呼んだ制約、すなわちコとアの非対称性は説明されなければならない。そこで平田は、Enfield（2003）の議論を援用し、コには指示詞として「指す」という意味のみがコード化されており（DEM）、アに「ここではない」という意味が、DEM に加えてコード化されていると考える。コの使用により、アの持つ意味の反対の意味、「話者の近く」が推論されると考えたのである。

しかしこれは、話し手の周りが絶対的に「近」でしかないことの反映ではないかと思う。Enfield（2003: 85）は、Bühler を引用して、次のように言っている。

（16） deictic expressions have a context-free dimension, namely the idea of a stable ‘deictic centre’ or ‘origo’, which anchors simple notions ‘I’, ‘here’, and ‘now’. ..., these are not semantically decomposable.「直示表現は、文脈に左右されない次元を持っている。すなわち安定した「直示中心」とか「オリゴ」と呼ばれるもので、「私、ここ、いま」という単純な概念を固定化する。……これらは、意味的にこれ以上分解することができない。

（Enfield 2003: 85、訳、下線部評者）

コとアの非対称性は、（16）の記述から直接導かれる。だとすれば、それが最も経済性の観点から見ても理にかなった説明であるように思う。

なお、平田はこの制約（＝「近称制約」）が普遍的ではないとして、英語では手に持っているものを that で指すことができるという Fillmore（1982）の例を挙げている。この問題については澤田（2013）が、英語で、話し手が手に持っている、あるいは手に触れているものを that で指す場合を詳しく論じているので参照されたいが、評者が澤田の例文 1 つひとつを母語話者（ニュージーランド出身）に聞いたところ、かなり特殊な状況を設定しなければ、英語であっても that では指せず、デフォルトでは this を使うという。例えば、that を使用する際に、話者が指示対象を一切見ずに話すなど、あたかも対象の所有権を放棄して、聞き手の領域にあるようにするなどの操作が必要であるという。[2] 評者がこれまでに行った調査によると、手に持っている対象をその言語の遠称にあたる指示詞を用いて指すことができる言語は、今のところ確認できない（マレー語、クメール語、タイ語、ベトナム語、モンゴル語、ミャンマー語、韓国語。Levinson（2018）ではオランダ語

[2] 査読者から、1 名の母語話者の調査のみからこのように論じるのは拙速ではないかと指摘をいただいた。そのとおりであると思うが、手に持っている物を that で指すことが難しいという話者が存在する事実は、今後のさらなる議論のためにも必要な情報であるとして報告しておく。この用法については澤田（2013）が豊富な例を挙げ詳細に議論しているが、それぞれの例に対して、目線はどうであるか、that を用いればどのようなニュアンスが生じるか、検討する余地があると思う。本稿の文脈においては、英語で that が、話者の手に触れている物に対して言えるという事実が、即「近称制約」を言語個別的な現象として批判の的にすることはないという点を強調しておく。

では指示できるとあるが、慎重に検討する必要があるだろう。後述する）。

以上のことから、コとアの非対称性をもとに、コとアに尺度推意を設定する議論は、興味深いものの、より活発かつ慎重な議論に基づく検証が必要であろう。

3.2. 自説の主張について

平田はコ系指示詞について、Enfield（2003）の議論を援用して、コには DEM のみがコード化されており、DISTAL がコード化されるアとの対比により ‘HERE’ であると推論されるとする。まず Enfield（2003）のラオ語に関する議論を見よう。

ラオ語には nii4 と nan4 という指示詞がある。話し手と聞き手が相互にやりとりしたり、物理的な空間の区切れがあったりすると、抽象的な ‘here-space’ が生じる。‘here-space’ は刻一刻と変化する。nan4 は、DEM に加えて ‘not-here’ がコード化されている。したがって、‘here-space’ の外の領域を指す。nii4 の ‘here’ という意味は、nan4 を使用しないことによる推意であると Enfield（2003）は主張する。

ラオ語では、指示対象がかなり離れていても、対話参加者がそこかしこに分散して存在しており、話し手が全員に向けて話すというような場合には、近称である nii4 が使用される。このような場合には ‘here-space’ を作る境界が存在しなくなるために、‘not-here’ の領域がなくなり、nan4 が用いられる余地がないためであるという。

平田は、Enfield（2003）の議論が日本語にも応用可能であるとする。このことを示すために「自発的な使用（spontaneous usage）」の場を用いて分析している。コが使用される場合として、i）話し手の here-space に含まれる対象、ii）明確な here-space がない場合、iii）話し手の here-space に含まれない対象を指す場合　の 3 つに分けて論じているが、iii）を設けてしまうと、コが here-space 内の対象を指すという前提が崩れることになるのではないだろうか。コが here-space の外の対象も指せるならば、アとの違いは何なのかという理論内の問題が生じるように思う。

次に、ii）について見よう。これは上記ラオ語の、対話参加者が分散して存在している場合である。平田は、観光ガイドが複数の参加者（ガイドの周囲にバラバラに立っている）に向けて拡散的に話す場合には、このようなコが用いられるとした。この場合には、ガイドはたとえ本人が指示対象から離れていてもコ系を用いることができることを示した。

（17） G:（歩みを止め、聴衆の方に向き直り）
はいこちらの方まっすぐ来たらドンとぶつかりますね
ひとつの町内しか見えません
（後方の聴衆が着（ママ）いてきているか確認する）
G: でここの　鉄柱

｜右方の鉄柱に顔を向け手を上げて鉄柱を指しちらっと聴衆を見る
……（中略）……
?: ああー
G: これはー
B: 普通どおりに読むの？
G: はい（B を見て）これは素直に読んでください（以下略） （p. 110）

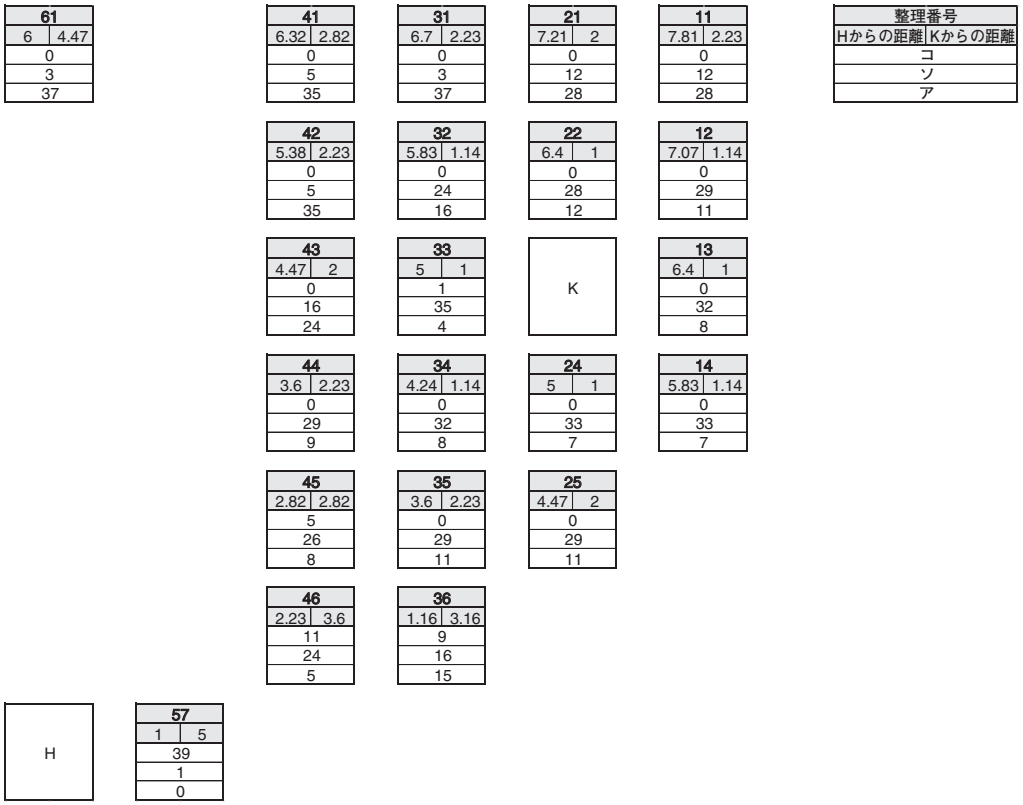
しかし、この観察をもって、ラオ語と同様の分析を日本語に施すことができるだろうか。G は最初に「でここの」と言い、数メートル先の電柱を指している。この段階で、here-space が分散している聞き手を取り囲む形で形成されると考えることはできないだろうか。その中の対象は、以降コで指されてもよいことになる。つまり、この例のみをもって、here-space が作られていないと言うことはできないように思われる。本章の議論には、このように、別の分析が可能なデータが散見される。それは here-space という抽象的な概念を用いるために生じるものである。コが生じたのは here-space がこのように形成されているからだと議論しているのか、here-space がこのように形作られていると判断するのはなぜかというと、コが用いられているからだと議論しているのか判然としないのである。この意味で、多くのデータが循環論的に議論されているように思われる。

さらに、Enfield（2003: 104–105）の例では、人々がかなり離れてお互いに会話を行っている（聞き手は話者の左側 20m に数人、指示対象である川の向こう側 25m 以上離れている水牛を引く聞き手が一人）。(10）についての調査のように、日本語でこれほど離れた場合に、コ系指示詞を用いることは難しい。このことからも、ラオ語の議論を直ちに日本語の指示詞の説明に応用することはできないと思われる。

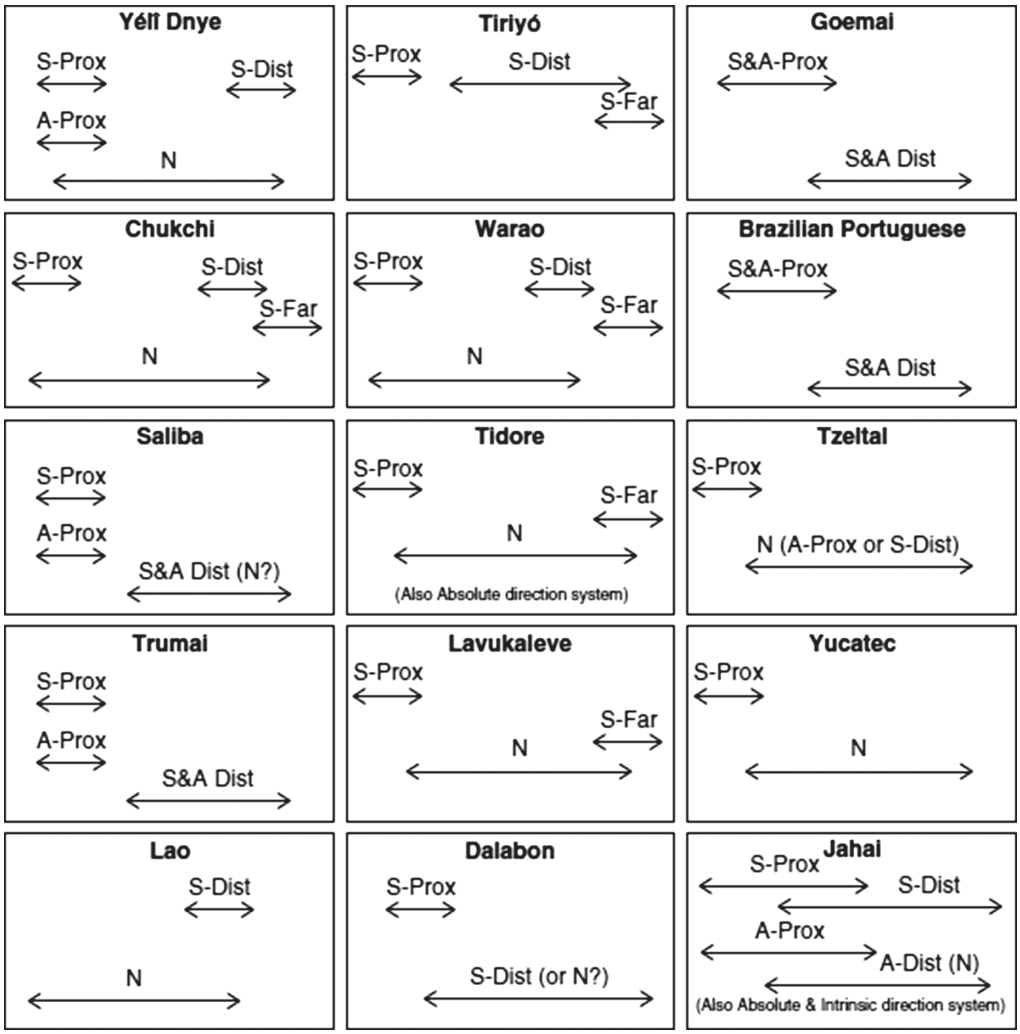
3.3. 空間的な意味がコード化されないのは本当にコであろうか？

Levinson（2018: 24）は、3 項対立するような指示詞体系をもつ言語では、従来考えられている「近、中、遠」という対立があるのではなく、「近」と「遠」をコード化した指示詞と、距離についての指定がない無標、あるいはニュートラルな指示詞が存在すると指摘している。この考えに従うならば、もっともコーディングが少ないのは中称とされてきたソではないかと考えたくなる（澤田 2019 も同様に指摘している）。評者が過去に行った実験調査においても、ほぼ全ての話者によってコ・アで指される領域はあるが、そうでない領域、すなわち判断が揺れる領域においてはすべてソが観察されるのである。図 2 は堤（2015）からの引用である。H が話し手、K が聞き手の位置を表し、それぞれの机にあるものをコソアのどれで指すかを 40 人の日本語母語話者に聞いた結果である。57 ではほぼ全員がコと答え、61 ではほぼ全員がアと答えているが、それでもソが現れている。これは、Levinson（2018: 26）のニュートラルな指示詞の分布に似ているとも言えまいか。

【図 2 母語話者による指示詞コ・ソ・アの分布（堤 2015: 99)】



【図 3　15 言語の指示詞の対立のスケッチ　N がニュートラル】（Levinson 2018: 26 より引用）



もしソ系指示詞をニュートラルであると捉えるならば、聞き手領域指示についても改めて検討しなければならなくなるだろう。その可能性は十分ある。日本語には、聞き手とは無関係に現れるソ系指示詞が存在することが分かっている（堤・岡﨑 2022）。「基準指示」と言われるものがそれであるが、「そうだ！　京都行こう」などの「思い出しのソ」、「そんなにおいしくない」などの否定対極表現に表れるソなど、全てのソ系指示詞の用法を統一的に捉える理論の構築は、本書の主張の是非の議論とともに間違いなく活発化してくるだろう。

4. おわりに

以上、本稿では、平田（2020）のいくつかの章に焦点を絞って、その功績と、評者が考える問題点を指摘する形で論を進めてきた。本書のように、ある形式の理論に大きなパラダイムシフトを求めるような論考には、大きな問題点が指摘され、それをきっかけに議論が進み結果としてその形式の理解が深まることになるものである。その意味で、本書の学術的価値は計り知れない。評者の指摘した問題点の妥当性もふまえつつ、本書を通して読み、指示詞の研究の奥深さに触れていただきたいと願っている。

参照文献

Enfield, N. J. 2003. “Demonstratives in Space and Interaction: Data from Lao Speakers and Implications for Semantic Analysis.” *Language* 79, 82–117.

Fillmore, C. J. 1982. “Towards a Descriptive Framework for Spatial Deixis.” In Jarvella, R. J. and W. Klein (eds.) *Speech, Place, and Action: Studies in Deixis and Related Topics*, 31–59. Chichester: John Wiley.

藤本真理子. 2018.「中古のカ（ア）系列とソ系列の観念指示用法──古典語における知識の切り替わりから──」、岡﨑友子・衣畑智秀・藤本真理子・森勇太（編）『バリエーションの中の日本語史』、103–118、東京：くろしお出版.

金水敏・田窪行則. 1990.「談話管理理論からみた日本語の指示詞」、『認知科学の発展』3、85–116, 日本認知科学会（金水敏・田窪行則（編）（1992）『指示詞』ひつじ書房所収, 123–149）.

金水敏・田窪行則（1992）「日本語指示詞研究から／へ」、金水敏・田窪行則（編）『指示詞』、151–192、東京：ひつじ書房.

Hoji, H., S. Kinsui, Y. Takubo and A. Ueyama. 2003. “The Demonstratives in Modern Japanese,” In Li, A-H. A. and A. Simpson (eds.) *Functional Structure(s), Form, and Interaction: Perspective from East Asian Languages*, 97–128. London and New York: Routledge.

Levinson, S. C. 2018. “Demonstratives: Patterns in Diversity,” In Levinson, S.C., S. Cutfield, M. J. Dunn, N. J. Enfield and S. Meira (eds.) *Demonstratives in Cross-Linguistic Perspective* (*Language Culture and Cognition*), 1–42, Cambridge: Cambridge University Press.

岡﨑友子. 2018.「現代語・中古語の観念用法『アノ』『カノ』」、岡﨑友子・衣畑智秀・藤本真理子・森勇太（編）『バリエーションの中の日本語史』、119–138. 東京：くろしお出版.

澤田淳. 2013.「視点、文脈と指標性──英語指示詞における聞き手への指標詞シフトの現象を中心に──」、『語用論研究』15、1–23.

澤田淳. 2016.「指示と照応の語用論」、加藤重広・滝浦真人（編）『語用論研究法ガイドブック』、49–76、東京：ひつじ書房.

澤田淳. 2019.「書評論文 指示詞研究の新展開──空間指示詞の類型論──（Stephen C. Levin-

son et al.（eds.）*Demonstratives in Cross-Linguistic Perspective*.）、『語用論研究』21、161–186.

田窪行則. 2002.「談話における名詞の使用」、仁田義雄・益岡隆志（編）『日本語の文法 4　複文と談話』、193–216、東京：岩波書店.

田窪行則.　2008.　「日本語指示詞の意味論と統語論──研究史的概説」、『語学教育フォーラム』16、311–337、大東文化大学語学教育研究所.

堤良一. 2012.『現代日本語指示詞の総合的研究』東京：ココ出版.

堤良一.　2015.　「中国語母語話者の日本語使用における指示詞の直示用法──台湾での調査から──」、『2015 年度台湾日本語教育研究国際シンポジウム論文集』、91–102、台湾日本語教育学会.

堤良一.　2018.「直接経験が必要ない記憶指示のアノ」、岡﨑友子・衣畑智秀・藤本真理子・森勇太（編）『バリエーションの中の日本語史』、139–156、東京：くろしお出版.

堤良一・岡﨑友子. 2022.「心内の情報を指示するソ系（列）指示詞の用法について」、『言語研究』161、91–117.